



文庫 20
153

角田川



田云連新之道中古為母とて皆
 此より一ノ作何事此法戦中在と
 系何れの代と云々と云々ト云々其外
 之富なる事能く下る月法経
 此一と云々に云々ト云々云々云々
 云々云々連新之事たる云々云々云々
 云々云々此句下此句と云々新めく書

まふまふの事とてしるすや侍るしとて此
句云ふに下此句と付下の句は
尸せとの句と付るは下一業平此
東宮よまの事なりし物

くちくこれとねれぬえりあはれ
と云わぬ世経る事よ

又あふ改れ実もこゝろたし
とついでつりてしるすよに中付
り家いなる事とて ~~東宮~~ 東宮よま侍る事

~~東宮~~ 東宮よま侍る事とて入侍るは上平
に侍る侍る事とて侍る侍るに侍る
近事真老古二條侍政殿の事とす
ひく好まじと撰ひ侍る事とて侍る侍る
善阿弥之教誨信業用侍る事
なまを侍る侍る事とて侍る侍る
侍る侍る事とて侍る侍る事
侍る侍る事とて侍る侍る事
侍る侍る事とて侍る侍る事
侍る侍る事とて侍る侍る事

自此程と長きことわめて初めに
等しく御書のみ多く傳ふるは
其書此書なるの程よきけり一句は
去程のたもを傳へたるもや傳ふも
て存用初一人の程と致して天下皆
是程なることさすは教書よ
及もやあはれ一句と存しむら初め
第一大書なる句傳ふは此程用初
の句はあはれも傳ふは此程

なと存すことさすは此程用初よ
亦及るはれは此程よと存すこと
世に存すは此程よと存すこと
林村存すことさすは用初なる
あはれ門分多く傳ふは此程よ
此と中古と存すは此程よと存す
宗初流下け遠此明流あはれと古中
古とさすは此程よと存すは此程
しと古の用初と存すは此程よ

なるべし又

三才報とやら凡そ身よりして名前の御礼

すまはぬは芽が芽あたけ又月ととる心

に有歸のきけも無念作力にひく

とあるは有報とれたけをりし後ひあは

まらしてこ有はすこわくぬを付作らる又

うらまに御風をこし旅持て衣るこまの味とあは

げ、身を何方がし付て無念作らるし又

むこは海のにこころをいさるる雲の釣舟のこ

け、身を皆水色に縁を物にこく何事をも

こよりして付作らるし、是れは身をこいあ

こ、心合念たあしのかうなるし、只心此

あらしと能くもあふして神こあ、身をた

所、流んし、之、実念の類甚快有るし

御、病のゆ、あ、さ、ら、る、は、屋、上、の、麻、を、と、や、り、ん

け、中、新、妙、く、心、教

意、心、を、胃、麻、巧、し、し、旅、り、と、れ

教、句、に、を、ら、し、こ、こ、し、て、あ、ら、る、は、又、中、あ

付く事

鹿の声入るる子なるしに三三

三三 鳴流流此也門此夕

是之在中

流流流河每此下流母此席の多なる

流流流多平多此鳴言し多多流好是と此

多此之方也く付流なる

一 流流流流く付也如に付く多ま流なる

多云流流流を言ら是とわらく多入

達之月半れはまて多し丸く付く

に多なる或は自身丸或は丸丸く

に先子の多しと云侍多し此見示

付物流と云わ流る人いそ多

皆古く付多流と云新わく

付多し多なる多し其中に多

人を同し多し多しと云多

多し多し多し多し多し多し

多し多し多し多し多し多し

二百とくくしつらましくいふをたはれは
明れのまてこころ二百よましく**和**凡のまて
和凡のまてこころとわまけはたふさくま
有**明**れの上**和**凡のまてよまてのありた
おのまてとわらはらば多ふくこふは**和**凡
れまよ**和**凡の眼まてとぬまてく時程
にいつらて**和**凡のまての子となれこころ
れまてこころのまていまてとくこころ若
しうまてくまてく**又**明れのまてと和凡のまて

皆**明**れこころにたはれまてくこころいふこころ
京あまののまてくたはれ**明**れと云ふ
よけくまてくまてく**和**凡のまてと云ふ
してまてくこころたはれまてくまてく**和**凡のまて
和凡のまて**和**凡のまてと云ふまてくまてく
たはれ**明**れと云ふ**和**凡のまてと云ふ
のまてくまてくまてく**和**凡のまてと云ふ
まてくまてくまてく**和**凡のまてと云ふ
まてくまてくまてく**和**凡のまてと云ふ
まてくまてくまてく**和**凡のまてと云ふ

そい柳 昔昔白帯 登すまわしりきりちと結
むにき定流の宮と傳らんよりきあめい
解りしりおがくれハトに及らん

一 尚村まよ名よと付草に名あき
けりしりあめい結をいりちりしりまや

三三三むしりち申古とさなは松よこ
にち別しちりしりけりしりち
柄と傳らんはこれの名のまと付
何り昔しりしり昔登すまよと云句は松

松京橋をけりちいやめいひは
あそと作るのよ名は草とけりしり
系と傳らんは松よと氣はあかと傳らん
よと結しりしり小中よ草あかと云よ
牙と付るは松よとわんよと結あ
葉と云句はにの下草新結のちよ
をけりしり結しりしりしりしり
今一又あめい白に一のあめいしり
孫孫よ新のまよと云句は結しり

る物あつたふりかよしふ里と侍りよ
とては女のたれり花付侍りよ子卯好く
ふ里よ後ちうん人もこれと侍りよ
華のたれと侍りよ唐と侍りよ
の格のりを侍りよ
花作のたれと侍りよ
系身とあまり侍りよ
花のたれと侍りよ
ふ里よ後ちうん人もこれと侍りよ
華のたれと侍りよ唐と侍りよ
の格のりを侍りよ
花作のたれと侍りよ
系身とあまり侍りよ
花のたれと侍りよ

一 次名取と好くまはるる名女と好くまはるる
とては白相のたれり花付侍りよ
花のたれと侍りよ唐と侍りよ
の格のりを侍りよ
花作のたれと侍りよ
系身とあまり侍りよ
花のたれと侍りよ

△**善**ふもいふしはふらるる此様くも
又よごり方らなる事守に侍り又付に
そいふと頼みよつて然るれよむれ
てとて思ふと侍るも侍れぬ様
様ふなるもといふ中御うとる文よおの
るも必らとてしよされといふとていふ事いふと
様ふとていふに侍るもいふとていふ事いふと
いふとていふとていふとていふとていふとて
侍りくもいふとていふとていふとていふとて

白き御もいふに侍りて
たふともいふに侍りて
白き御もいふに侍りて
たふともいふに侍りて

田に渡り侍る大和路

いふに侍りて

ワの玉を神に七代とていふとていふとて
けお白文よとていふとていふとていふとて
を立回侍るもいふとていふとていふとて
大和路なるもいふとていふとていふとて
侍るもいふとていふとていふとていふとて

その人ひんちるといふはきき流の事をも
けしき作せらるる人々を**在在**部
在在部新と申らるる作
一 惣に初中流流の中取及いなるの
事に依り

△**そと**流のよお申はるる**中**並
たおおちとら入い流**及**見ゆる流**知**流
えんかときいひもあく**古**よりいひ
申はるる流の**身**といふ流もあはく**知**

く可ら文字くもらちいもいあるといし
て流のよおられ流のよおとら**中**とら
お申とらしんを**身**とらとら**中**とら
去流と**連**流とら**中**とらとら**中**とら
つふまるといふ人といふ人といふ人
いからいから流のよおとらとらとら
おとらとら**中**とらとら**中**とらとら
とらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとら

高のよきく集むる此集とたよけ人
にちんせられぬわは潤のくさくいらあ
よなな〜とよ垂下に草一つふ復
はよきじわ相の母の法と云くあは
下アとくよは長月所のよ或人まよふとは
こて阿佛の教句と云く〜と云よ

くあそくや秋のつぎりよちりよちり
こ〜とつ〜とれい人こ百勅して相言
に系一産信り〜とよ又阿仏の教句

とんたれん

くあそくやそれけはわにちりよちり
こ〜とつ〜とれい人こ百勅して相言
と寸連のや教句と題同と云く七念其
時そん〜とくた〜とま〜と云く〜と云く
ちり〜とや彼阿仏を安楽の院ア来こ
てあそくのや法こい〜と云く初を貴
教句よ下下にわ中〜と云く〜と云く
ま〜と云く道と字らあ教へむを難す

楽し修又若きつやうに好む侍り
為りまゝにんげんにてよ代この先達此
仕て侍る教句此すまゝに記し侍る
引んおそ考へに於て可多し次是
可多し相とをむるに於て那教
教多し可多しとをむるに於て曰
吾をたむるに於て此の言の如く
花一才極ぬ顔乃常之む之曰
心つえとくをむるに於て其の言曰

小松と接子侍りたるに於て曰
名と一ぬ山草花は川を流す
げ又つをむるに於て其の言曰
若くはやうにむるに於て其の言曰
根ありて流す又大いなるに其身に
つとをむるに於て其の言曰
日の所を流すを白くするに於て其の言曰
け教句を侍るに於て其の言曰
此千句は流すをむるに於て其の言曰

西陣の足傳を罷たす御座候事
新敷向付候人此れは
らるる意に足傳候

足傳又とあるは
此れは又とあるは
此れは又とあるは

足又初つて
此れは又とあるは

足又初つて
此れは又とあるは
此れは又とあるは
此れは又とあるは

此れは又とあるは
此れは又とあるは
此れは又とあるは
此れは又とあるは

にとも~~事~~所の教句がたたくこおしくあ
つらんこふおまじきれちらん凡格報を
うのこつふまうらんこおまじき
るつらんこまじきとふれおのれは凡
とこおまじきとこおまじきとこおまじき
案一のちりりたるまじきことおまじき
うまじきとまじきとまじきとまじきと
いつとまじきとまじきとまじきとまじきと
そとらんちるまじきとまじきとまじきとまじきと

教句とおおしくせん時を日地一具の凡
格とともあまじきことおまじきと
人をたつきことおまじきこと

一 眼子之有実作のあや

云々云教句を三月は後として何と
作らるる眼子と何とせん遠く
所一かたなる眼子も何とせんよ
るまじきことおまじきこと
心と法とまじきことおまじきこと

月此をわすれしころをさうし又各句よ
ちまひにれらるる(ち)ちしつちふきつち
まふちまふちまふち(海を)ししし
てまふち又十句ちよあまよはれかよ
ちししちしちしちしちしちし何れ
くちしよ無れちしししししししし
ちししちししちししちししちしし
ちししちししちししちししちしし
ちししちししちししちししちしし
ちししちししちししちししちしし

大正やにちししちししちしし
くちししちししちししちしし
くちししちししちししちしし

一 連物よちししちししちしし
ちししちししちしし

△ちししちししちししちしし
ちししちししちししちしし
ちししちししちししちしし

ちししちししちししちししちしし

佛 ~~なま~~いせよたよらふ

二月の事 ~~は~~ 雜子 ~~の~~ 事 ~~を~~ 記す

いづか ~~し~~ 公 ~~を~~ 記す ~~ら~~ ち ~~の~~ 事 ~~を~~ 記す ~~ん~~
とく ~~の~~ 事 ~~を~~ 記す ~~ん~~ 何 ~~を~~ 記す ~~ん~~ 乃 ~~事~~
に ~~言~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~
此 ~~終~~ り ~~方~~ 切 ~~る~~ 事 ~~に~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~
記 ~~と~~ 云 ~~を~~ 記す ~~ん~~ 初 ~~我~~ 自 ~~の~~ 事

~~神~~ 記す ~~の~~ 事 ~~を~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~
り ~~に~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~

~~一~~ ~~事~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~

いづ ~~か~~ ~~し~~ ~~の~~ 事 ~~を~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~
し ~~る~~ ~~事~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~
ま ~~ご~~ ~~の~~ 事 ~~を~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~
た ~~る~~ ~~事~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~
ち ~~れ~~ ~~事~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~
脚 ~~も~~ ~~ん~~ ~~の~~ 事 ~~を~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~
こ ~~の~~ 事 ~~を~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~
一 ~~事~~ 記す ~~ん~~ の ~~事~~

△ 昔は云ふ可十師と申して亦八段と
に十師の也と云ふ可十師新法に
飛鳥初十師一鳥と云ふ可十師と
分傳しんを習ひて云ふ可十師と
長きく悲と云に云ふ可十師と
なる可十師と云ふ可十師と
可十師と云ふ可十師と
得る可十師と云ふ可十師と
に付傳る可十師と云ふ可十師と

天の道よと云ふ可十師と云ふ可十師と
可十師と云ふ可十師と云ふ可十師と
可十師と云ふ可十師と云ふ可十師と
可十師と云ふ可十師と云ふ可十師と
可十師と云ふ可十師と云ふ可十師と
可十師と云ふ可十師と云ふ可十師と
可十師と云ふ可十師と云ふ可十師と
可十師と云ふ可十師と云ふ可十師と
可十師と云ふ可十師と云ふ可十師と
可十師と云ふ可十師と云ふ可十師と

小胃齋此書に云ふ可十師と云ふ可十師と
可十師と云ふ可十師と云ふ可十師と

別にる枯の山霞凡等まよふりに人の愛もて
 和凡よ山霞凡等まよふりに人の愛もて
 和分比浦又の分うこれいことまこと言曰とて
 田子比浦よ打出えれい白ぬ此箇出のさぬはつち
 たよあやこれ分まよひの言まよ 作作
 小新 常きく 志事 流頼 流流
 後書極 意流 家書 定家
 最隆く分まよおきしるるん分法
 常にわよけて打流く口の連歌

此乃と白ひと丸合く東流然くし
 流く山おかしことたきく言ひす
 分を得家より分を作弄花香満衣
 こ云くことくたまらるく分万葉をこかく
 分をとりくを言信ふの分るくこれと
 万葉此乃とくくくく分るく分る
 此乃とく分を信ふの分るく分る
 思ふ不及は此乃とく分るく分る
 新流く分るく分るく分る

の初とあるより多しに人多く
将可待たずし相連なりぬく足傳ふ
るまを教示す御親由心教を
足等しく向むるを深く初と云ふ
しんぢとてはよなれた白梅は
結さるんごおふるなると申と
すまの句を傳へるなり此の如く
男と云ひて入第をさすしんぢ
此の如く申とすれはさかたに
白に

よらてい程の風情と云ふ作これと
なること傳へるなり

一 白に能くしに申古由世と云ふに
傳へ

若くは一句く能くも由世に
傳へり申古をたれはさかたに
なるに能くしに申古をたれは
白に能くしに申古をたれは
白に能くしに申古をたれは

増く此の日のしるし地あり
供人のけせをなほしたる
教安をいれたるの使し
麻の言よぬれは病とせん
なまの根こしとほふとく
を述ぶるは根を

酒をよよ一平なる梅咲く
月よらるるをげせのまの
山の中とつる言よ麻の
御

山橋のふれよとと根えく
似たりて思ふもたも
様の花のあはるも身と物
足ぬれは白く又むふ
麻言よ行山群よめ
なまの根をこしとほふとく
道巧し中古中田を
合くぬれは病とせん
麻言よ行山群よめ

車はよき車はよきし物くハ詞集
け念ふも侍り此れも別のため
人をこのことわしるるしるし

一 漢之古よりと和射之よりよけり
如何

△若くは縦ハ漢之古より二句強きて
存りて曰くはと侍り此れも別
此二句よりりて和射之よりよけり
さきのめを和射のよりよけりして付

車はよき車はよき

車はよき車はよき

人の心より侍り此れも別

二句其の侍りたる彼右近の馬場

目より日向ひよきし家女車と見

すしありては車中侍りしと見合

右近の侍りしは此れも別と見合

車と物見車よきしと見合

車と物見車よきしと見合

大するちりしはあはれいあひしり
かもしはれをばるるこころち切し
いふ又あはれちりるこころあはれ
まはれはしあはれちりるこころ

一 神祇尺取の句は法華侍家
あは

△是乃云尺取之所法及仏飛中寺
山寺行ひ定め声喚起一寺声をあ
り帯こころいふ尺取こころあは

秋也所油陀葉脚 諸隨法一味の句
こころ尺取こころあはれこころいふ
作一句こころいふ尺取こころあは
いふ神祇も同じく尺取こころあは
て尺取こころいふ尺取こころあは
れちりるこころあはれちりるこころ
尺取こころあはれちりるこころあは
よこころいふ尺取こころあは

一 中古より尺取の句は神祇もあはれ

こまのり

△ 昔を連歌を以てのりよりよとて古き
と物とるるもいふる所よ古きよき
河とるるもいふる所よ古きよき
水も田守の守也し文とけ霜
ゆらん水も浦もたよる此詞
はくもいふる所よ古きよき
あわ〜と昔歌に好む此中よき
河は北人よ〜ぬ詞と法中に傳

此をこれよむれりよ古きよ
あ〜と昔歌に好む此中よき
河は北人よ〜ぬ詞と法中に傳

一

△ 昔を連歌を以てのりよりよとて古き
と物とるるもいふる所よ古きよき
河とるるもいふる所よ古きよき
水も田守の守也し文とけ霜
ゆらん水も浦もたよる此詞
はくもいふる所よ古きよき
あわ〜と昔歌に好む此中よき
河は北人よ〜ぬ詞と法中に傳

とけわねてけあわさるる
乃を御云々
初よくつ
よらく

あつたも

あつたも

あつたも

あつたも

あつたも

の根之白き下
先年
年や
河の
の

あつたも

あつたも

あつたも

あつたも

げ道らん申くはなまを申せし何ぞ
こをお新てよき道よ入目もさく
又さうかを教わすよのねりかたをさ
げ道乃好勢也旁路よはらさる
ゆらんを先実加と号よ一いつ
とく往左玉清湯と経よりし名
とをわけまうれおと申し地不
此界と号と一一人の隙と号又
人の分と号と一一人の隙と号又

よりと申すもなまを申せし何ぞ
とわよりけしぬまを申せし何ぞ
生火れと号と一一人の隙と号又
神と号と一一人の隙と号又
に飯と号と一一人の隙と号又
宵と号と一一人の隙と号又
人と号と一一人の隙と号又

一
和漢通訳の時、心を結ぶと云ふ
言ふと云ふ、常に遠くを往く

得くを言下に力きういふといふの体
るし其原を連詔たつこの事や
あつとんうてもさる事とあはしく
な連詔ことのこめく行ひぬ
ししこは情を体こうてや詩人
道ては程く心体くは何し身
う体くしいうしかとこさくあはく細
は左刀こその句しはまといふ
凡情を賦こしよあといひて一白を

いれきうしたまきうの事とあふや
ふらうくはあふも詩詔この時
奪にを長こうてむしに依

一 案とてその事案とすしあふと
をい名こうていふ

案云 縦令いふは百その事題
案後頼こちとてし中よ考先
とあはしむる事とていふ事行
及ふて十日と廿日を案してを

此題を一日の一日は終るべきを
連語をいれぬくもるものあり
その句にをんしつるに曰ふ
しつるに又果るにけり
向はは幸方とて業はるもの
要にゆえ又中可しく
作はるものいふく仕
ふ又すといふしつるに
くまのわをたてたるを

と侍もなしく
河とつとけし

右第一冊を武苑
たつよか
見ぬ人
大傳れ
まつり

よ物候をうつふまうりしよと候いた
なまくだるも月待りてり侍るといふの
近き限りといふと候とていふ
此ちよひ道のていふとて侍りてり
あふまうりし侍りてり又いふの
こまかよとていふていふとていふ
侍りてりしと後よ候てりてり
りしとていふとていふとていふ
いふとていふとていふとていふ

候んて朝とまうりていふ

天文十二卯^亥 林鐘十三日 宗祇^亥 丑

借給玄祥小羊書寫く所也

萬治元年林鐘日

右ノ書月三ノ夜

